



TITLE:

# カタルーニャ人の言語-カタルーニャ語とその他の言語

AUTHOR(S):

カルマ・ジュニエン, M; 塚原, 信行

---

CITATION:

カルマ・ジュニエン, M ...[et al]. カタルーニャ人の言語-カタルーニャ語とその他の言語. ことばと社会 2011, 13: 190-198

ISSUE DATE:

2011-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/240840>

RIGHT:

発行元の許可を得て掲載しています。

〈寄稿論文〉

# カタルーニャ人の言語

カタルーニャ語とその他の言語<sup>1</sup>

M. Carme JUNYENT

M. カルマ・ジュニエン

塚原信行

カタルーニャ自治州における21世紀最初の10年間は、人口動態上の目覚ましい変化によって特徴づけられる。この間、630万人あまりの人口が750万人に達した。増加の主因は、世界中からやってきた100万人を越える移民である(表1、ただし、表の「外国籍人口」と「移民人口」には多少の違いがある)。

カタルーニャではすでに2002年時点で、移民人口割合がヨーロッパ平均(5%)に達しつつあったが、2010年時点では15%に達しようとしている。総人口に占める移民の割合の高さそれ自体はもちろん、これが言語面に与える影

表1 カタルーニャ自治州における人口推移

(単位: 人)

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
スペイン籍人口	6,104,011	6,124,373	6,161,138	6,170,473	6,196,302	6,220,940	6,231,170	6,389,335	6,414,342	6,420,948
総人口中の割合	96.0%	94.1%	91.9%	90.6%	88.6%	87.2%	86.6%	86.8%	85.8%	85.5%
外国籍人口	257,454	382,097	543,008	642,846	798,904	913,757	966,004	974,743	1,061,079	1,091,433
総人口中の割合	4.0%	5.9%	8.1%	9.4%	11.4%	12.8%	13.4%	13.2%	14.2%	14.5%
総人口	6,361,465	6,506,470	6,704,146	6,813,319	6,995,206	7,134,697	7,197,174	7,364,078	7,475,421	7,512,381

カタルーニャ統計局 (www.idescat.cat) データより作成

響も非常に興味深い。カタルーニャ語とカステイーリャ語によるバイリンガリズムを目標として言語政策を推進してきたカタルーニャは、気がつけば250以上の言語が話される多言語社会になっていたのである。現在カタルーニャ社会で話されている言語数の多さは、明確に特定の社会的課題を指し示しているが、同時に将来の予見を難しいものになっている。以下では、カタルーニャの多言語化過程で特筆すべき3つの要素について概略を述べることで、この状況を素描したいと思う。3つの要素とは、移民の地理的分布、諸言語のダイナミズム、学校の機能および受け入れ言語としてのカタルーニャ語である。

## 移民の地理的分布

移民は都市部における現象だとしばしば考えられるが、カタルーニャのケースはどちらかといえば都市部に限られない一般的現象と言ってもよく、そもそもは非都市部で始まった現象であった。非都市部で始まった移民に関しては、もはや「神話」とさえ言えるエピソードがある。それによれば、1974年、一人のガンビア人がカタルーニャを抜けてフランスに向かおうとしていた。ところが国境は封鎖されていた。封鎖解除を待つ間、そのガンビア人はロザスで仕事を見つけ、しばらくそこに落ち着くことになった。地域社会に定着するに従って、彼の元には、親族や友人、隣人などが次々とやって来ることになる。現在では、ガンビア本国に次いでガンビア人が多く住む場所はカタルーニャ自治州のジローナ県である。カタルーニャの移民人口割合が5%に達しようとしていた2002年、ジローナ県での同割合はすでに9%に近かった。また、現在でも、カタルーニャ自治州全体の移民人口割合を6%程度上回る。ジローナ県だけでなく、バルセロナ、レリダ、タラゴナの各県にも、1990年代にはすでにカタルーニャ自治州平均を上回る移民人口比率が記録されたコマルカ<sup>2</sup>がある（バルセロナ県：ウゾーナ、マレズマ、バイシュ・パナデス／レリダ県：サガーラ、ウルジェイ／タラゴナ県：ムンシア）。

カタルーニャにおける移民が都市部（あるいはバルセロナ周辺）だけの現象ではないことを示す別のデータは、モロッコ人移民の分布である。モロッコ人はカタルーニャ最大の移民コミュニティを構成し、カタルーニャにおける移民人口の19.5%を占めるが、バルセロナ市の移民人口に占める割合は4.6%に

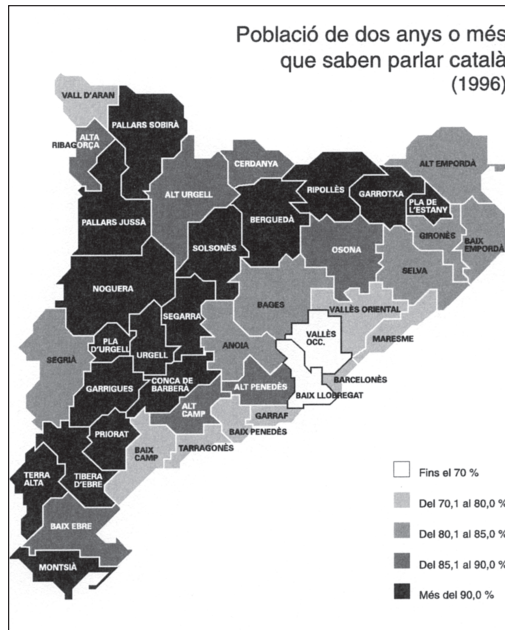
過ぎない。前述のガンビア人の場合、その数は確かに増え続けてきたものの、2002年時点で上位5番目であった移民人口全体に占める位置は、2010年現在では19番目となっている。それほどまでにニューカマーが急増しているのである。

## 諸言語のダイナミズム

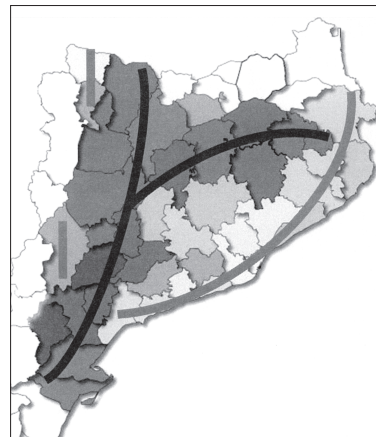
移民増加とカタルーニャ語をめぐる議論から

移民が社会全体に広がる現象となってきたこと、また、移民人口の割合が日増しに高まっていくことから、移民の増加とカタルーニャ語の将来に関する議論の口火が切られた。一般的には「カタルーニャ語はこの第二の移民の波<sup>3</sup>に耐えることができず、言語の存続にとって決定的な痛打となる」と理解されている。以前考えられていたように、言語置き換えの過程がもつばら都市現象であるとするなら、想像の共同体としてのカタルーニャにおいては常に、ジローナやビックといった、「カタルーニャらしい」カタルーニャを形成し、カタルーニャ語を守る最後の砦としての「田舎」があるので心配は不要だ、ということにもなったのであろうが……。実際のところ、この多言語化過程が始まる以前から、カタルーニャ語に関する気がかりな兆候が見て取れたのである。地図1は、1996年において「カタルーニャ語を話せる」人口の割合を示すものであるが、沿岸地域では最南部のムンシアを除き割合が90%を越えるコマルカがないことがわかる。また、東のバルセロナ周辺地域と西のレリダ周辺地域の間、カタルーニャ語マジョリティ地域を南北に分断する境界線ができつつあることも見て取れる。コミュニケーションと文化視聴財団<sup>4</sup>およびカタルーニャ研究院<sup>5</sup>は、「コミュニケーションと文化に関するバロメーター」を先ごろ公表し、このデータに基づいて「2010年・カタルーニャにおけるカタルーニャ語知識と使用：コミュニケーションと文化に関するバロメーターのデータから」<sup>6</sup>という分析もあわせて発表された。この分析データと、1996年のデータで用いられている変数は全く同じものではない（1996年の調査は「カタルーニャ語を話せる」かどうかについて取り扱っている一方、「バロメーター」は「日常的に使用する言語」について取り扱っている）が、それでも1996年時点で

地図1 カタルーニャ語を話せる2歳以上人口の割合  
(1996年)



地図2 カタルーニャ語を日常的に使用  
する人口の割合 (2010年)



中央部に南北にはるY字帯は割合が高く、これを沿岸部と内陸部の低い割合の帯がはさんでいる。

出所：Coneixements i usos del català a Catalunya el 2010: dades del Baròmetre de la Comunicació i la Cultura, p.26<sup>8</sup>

出所：JUNYENT, M.C. (1999) El català, una llengua en perill d'extinció? Revista d'Igalada 1, 27-38, p.32<sup>7</sup>

表2 カタルーニャ語使用と移民人口割合

コマルカ	2010年調査において、 カタルーニャ語を日常言語と 回答した割合	2010年現在における 外国籍人口割合
テラ・アルタ	89.0%	13.8%
ガリーガス	82.8%	12.8%
リベール・デブラ	80.4%	16.3%
バイシュ・リュブラガツ	26.1%	12.0%

出所：Coneixements i usos del català a Catalunya el 2010: dades del Baròmetre de la Comunicació i la Cultura  
p.25掲載データおよびスペイン統計院人口統計データより作成

表3 最初に習得した言語と日常的に使用する言語

	最初に習得した言語	日常的に使用する言語
カステイーリャ語	56.7%	56.2%
カタルーニャ語	35.3%	39.5%
その他の言語	7.6%	4.1%

出所：Coneixements i usos del català a Catalunya el 2010: dades del Baròmetre de la Comunicació i la Cultura  
p.7およびp.19掲載データより作成

指摘されていた分断傾向の進行を確認することができる（地図2）。さらに興味深いことは、移民の多さとカタルーニャ語使用状況には必ずしも因果関係がない、という可能性である。例えば、2010年データにおいて、カタルーニャ語を日常言語として用いると回答した比率が最も高かった3つのコマルカ（テラ・アルタ、ガリーガス、リベラ・デブラ）における移民人口割合は、カタルーニャ語を日常言語として用いると回答した比率が最も低かったバイシュ・リュブラガッの移民人口割合より高いのである（表2）。これは、カタルーニャ語使用の後退と移民の増加とは一般に考えられているほど強くは関連していない、という可能性を示唆している。

「バロメーター」にはもう一つ特筆すべき点がある。カタルーニャ人のその他の言語が可視化されはじめていのである。この種の研究においては、その他の言語の話者数は実際よりも低い結果となる傾向があるとはいえ、7.6%のカタルーニャ人がカタルーニャ語でもカスティーリャ語でもない言語を最初に習得した言語としていることは注目に値する。センサスというものが不正規状態にある人間を考慮に入れておらず、最初に習得した言語の隠蔽（かなり頻繁に見られる現象）も予期していないことを考えるなら、実際の数値はより高いと考えることができる。興味深いさらに別のデータは、最初に習得した言語と日常的に用いる言語との差である。カスティーリャ語について見ると、これを最初に習得した言語とする割合は56.7%、日常的に用いる言語とする割合は56.2%であり、その差は0.5ポイントである。つまり、最初に習得した言語がカスティーリャ語である者のほとんどがカスティーリャ語を日常的に用いる言語としていると考えることができる。一方カタルーニャ語について見ると、これを最初に習得した言語とする割合は35.3%、日常的に用いる言語とする割合は39.5%であり、その差は4.2ポイントである。また、その他の言語を最初に習得した割合は7.6%であるが、これらを日常的に用いる言語とする割合は4.1%まで低下し、その差は3.5ポイントである。以上からは、カタルーニャ語でもカスティーリャ語でもない言語を最初に習得した者の間では、かなりの程度カタルーニャ語が日常的に用いられる言語になっていると推定される（表3）。

## 受け入れ機関としての学校の機能とカタルーニャ語の役割

移民がより強いインパクトを与えた分野の一つは言うまでもなく教育であり、これは家族呼び寄せに負うところが大きい。教育分野に関しても、バルセロナのような都市部から離れた地域においてはより早期に、変化する状況に学校を適応させる必要性が認識されていた。すでに90年代には、ジローナ県とレリダ県のいくつかのコマルカにおいて、言語・学校・移民に関する会合がいくつも開催されている。「学校組織適応化のためのワークショップ (TAE)」が創設され、教材作成をはじめとする一連の活動が行われた。これらの活動は、その後の受け入れ教室の基礎を形成し、現在「多様性」を扱う際に用いられている方策の土台となった。この文脈においては、次の事項が強調されるべきであろう。つまり、さまざまな言語を背負ってやってくる子どもたちを学校に受け入れる仕事の大部分を担当したのは、自治政府教育省カタルーニャ語教育部門であったということである。受け入れという仕事を請け負ったのはカタルーニャ語の教員達であり、その結果、移民の言語とカタルーニャ語との結びつきは当然視されるものとなっていった。バルセロナ大学危機言語研究グループによる調査の過程においても、この結びつきの明白な証がしばしば見聞きされている。

この調査は「学校における移民言語の役割」(注1参照) というものであり、中等教育の教員を対象とするアンケートが含まれていた。アンケート依頼のために学校を訪問し、対象となる教員達を紹介された時に判明したことだが、その教員達にはあらかじめ「カタルーニャ語に関するアンケートを実施するための訪問がある」という説明がなされていたのである。調査は「学校における移民言語の役割」に関するものだ伝えてあったにもかかわらず！ また、ある学校では、調査に訪れた際に贈り物（「カタルーニャに存在しているいろいろな言語」という展示会のカタログと「カタルーニャ人の国々」というゲーム）を渡そうとすると、「それ（移民の言語）はあの人達の担当だから」と言いながら、わたしたちをすぐにカタルーニャ語の教員達へ引き合わせてくれた。

上述の調査結果は現在分析中だが、詳細な分析結果を待つまでもなく明白となっている事柄がある。それは、「学校では何語が話されていますか」という質問に対して、もっとも完全な言語リストを提出してきたのがカタルーニャ語の教員だということだ。別科目の担当教員、例えば、英語やカスティールヤ語



の教員と数学の教員の間では、リストの長さに大きな差は見られない。カタルーニャ語の教員は、自らの学校の言語的多様性について熟知しており、その他の教員は「カタルーニャ語、カステイーリャ語、モロッコ語」と答えるのがやっとというところなのである。

加えて注目に値するのは、第一言語（アラビア語、ベルベル語、中国語、ルーマニア語、オランダ語等）教室の整備や受け入れ教室設置など、移民の子どもを迎え入れるための諸方策を、わずか数年のうちに自治政府教育省が成し遂げた点である。受け入れ教室の運営データからは、カタルーニャの学校には少なくとも120の言語の話者が生徒として在籍していることが分かっている。それら言語のうちには、アラビア語のさまざまなバリエーション、ベルベル語、ルーマニア語、中国語とそのバリエーション、パキスタン系カタルーニャ人のマジョリティ言語であるパンジャブ語、アフリカの言語多数とフィリピン語が含まれている。現時点でより深い研究が必要とされているのは、間違いなく、学校環境におけるアメリカスペイン語の扱われ方であろう。いくつかの部分的な研究が示唆するところによれば、スペイン語の授業ではアメリカスペイン語は正当に評価されておらず、「間違い」として直される傾向にある。学校における移民の子どもへの受け入れの成否が多様性の認知に懸かっているのだとすれば、スペイン語の中の多様性も認められるべきである。

どれほどの言語が実際に持ち込まれているのかを知ることは、受け入れに際しての根本的な道具立ての一つとなってきた。とはいえ、最初の数年は、子どもたちの出身国の公用語で足りると想定されており、その結果、不幸ともいえる状況が生じていた（ベルベル語話者の子どもはアラビア語通訳者の言っていることが理解できなかったし、中国語（普通話）通訳者は子どもの話す広東語が理解できなかった）。カタルーニャ社会がこうした多様性を認識するにつれて、現実の諸策に変化が現れ、ニューカマーと受け入れ側との相互作用によって促進された言語態度および言語行動の変化すら観察されるようになった。このように言う「カタルーニャではカタルーニャ語が押しつけられている」と述べる者もいるが、カタルーニャに住む者はだれでも、カタルーニャ語を使わなくともカタルーニャでなら支障なく生活できることを知っている。カタルーニャ人の半分以上がカタルーニャ語を日常使用する言語とはしていないという「バロメーター」のデータが、なによりもそのことをよく示している。

また、移民によるカタルーニャ語知識の習得は、書類なしに「ナショナルリ



ティ」を得るための1つの手段となっていることも確かである。このことをよく示すいくつかのエピソードがある。あるガンビア人が幼い息子に、カタルーニャ語は大切な言語と思うか尋ねた時のことである。その子は「もちろん大切さ。だって、もしカタルーニャ語を話せば、僕はそんなに“黒”じゃなくなるから」と答えた。アフリカ人の子どもたちが登場する同様なエピソードはそれほど珍しいものではない。あるサッカーチームに所属するアフリカ人の子どもたちに対して、「黒組対白組」にならないように気をつかった審判が、他の子どもたちと混ざるように言ったところ、子どもたちは指示を拒否し、「だって、あいつら気取ってて、カスティーリャ語しか話さないんだもん」と返答している。また別のエピソードでは、警察官にカスティーリャ語で注意されたアフリカ人の子どもが「あいつ、おれがシャルネゴ<sup>9</sup>だと思ってやがる」と文句を言っている。

カタルーニャ語を話すことによってカタルーニャ人としてのアイデンティティを持つという事実は、出自の言語やアイデンティティの言語に関する気づきを促す効果も生んだ。ケチュア語やグアラニ語をバルセロナで学び始めている南米出身者がいる。その理由は、あるペルー人学生が語るように、「ここにあることは、私たちの多くに、あちらにあるものを気づかせてくれた」ことによるのかもしれない。あるいは、アルゼンチン人協会の代表者が言うように「バルセロナでケチュア語を学ぶ方が、ブエノスアイレスで学ぶよりも容易です」ということなのかもしれない。また、カタルーニャ語／カスティーリャ語という関係を、自分の出身国での従属させられた言語／公用語という関係に置き換えて考えてみた者は、以前は与えていなかった価値を自らの言語に見出している。あるセネガル人は、「カタルーニャでウォロフ語を“見つけた”。以前は話すだけで、まったく気にかけることはなかったが、ここでウォロフ語を勉強しはじめた」と語る。あるいは代替効果なのかもしれない。ある若いフルフルデ語話者は、カタルーニャ語擁護団体の中でも重要な「言語のためのプラットフォーム」に所属しており、「もう故郷から離れた自分は、自分のことばのために闘うことはできない。だからここでカタルーニャ語のために闘う」と述べている。

## 終わりに

最近、自治政府移民庁は、ニューカマーを対象とするカタルーニャ語コースについては、需要が供給を上回っていることを明らかにした。「バロメーター」のデータを考慮に入れるなら、新しい話者の大部分はニューカマーであるように思われる。こうしたことから考えると、相互性を基盤とし、階層化を伴わない諸言語の共存形式がそこから発展する可能性もあるのではないか。それによって、次にやってくる移民の波が乗り越えられるだけではなく、連帯のダイナミズムによってカタルーニャ語の活性化も同時に成し遂げられるかもしれない。

### ■注

- 1 Aquest article forma part del projecte “El rol de les llengües de la immigració a l’escola” FFI2009-09955 finançat pel Ministerio de Educación (本稿は「学校における移民言語の役割」研究プロジェクトの成果の一部である。スペイン政府教育省助成 FFI2009-09955)。
- 2 コマルカ (Comarca) は地域行政の一単位。
- 3 「移民の第一の波」は、フランコ体制下の1960年代から70年代にかけて最盛期をむかえる、スペイン国内他地域からのスペイン語話者の労働力としての大量流入である。
- 4 La Fundació Audiències de la Comunicació i la Cultura. カタルーニャ語地域におけるマスメディア視聴や文化活動に関する状況調査を行いデータを提供している財団。 <http://www.fundacc.org/>
- 5 Institut d’Estudis Catalans. カタルーニャ文化に関するさまざまな調査研究を推進する学術団体。カタルーニャ語に関しては、いわゆる「アカデミー」的な地位を有する。
- 6 <http://blocs.iec.cat/cruscat/2011/03/31/coneixements-i-usos-del-catala-a-catalunya-el-2010-dades-del-barometre-de-la-comunicacio-i-la-cultura/#more-2123>
- 7 <http://www.revistaigualada.cat/fitxaarticle.asp?article=331>
- 8 [http://www.fundacc.org/docroot/fundacc/pdf/dieta\\_llengua.pdf](http://www.fundacc.org/docroot/fundacc/pdf/dieta_llengua.pdf)
- 9 シャルネゴ (xarnego) とは、カタルーニャに住みつつカタルーニャ語を理解しないカステーリャ語話者に対する蔑称。